2022（令和４）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

学部・研究科名　農学研究科・地域環境科学研究科
学部長・研究科委員長名　坂田洋一・大林　宏也
学科名・専攻名　林学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　講じている ☑　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	シラバスの内容の点検をしながら授業計画・内容に関する検討を実施。専攻会議他を活用した検討に加え、各分野・研究室間における意見交換等も実施し、体系的な編成を構築するように全教員が取り組んでいる。	研究テーマ、進め方等、大学院生との修学にあたっての協議を継続的に実施している。 大学院生への教育・研究支援は、所属研究室において手厚く行っている。	履修科目に関する授業への出席、試験、課題等を通して成績評価、単位認定を行うとともに学位論文審査を通して学位授与を行っている。さらに分野を超えた専門的知識を有する外部有識者との連携も図られつつある。	学生の修学状況を把握しながら学習成果を評価している。 専攻内の所信発表会、中間発表会および修士論文発表会などを通じ、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に差が生じないように専攻内で議論している。また、研究室内での発表によるプレゼンテーション能力の向上を図っている。	シラバスの内容の定期的な点検、授業計画・内容の検討を通した教育の改善・向上を実施している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 シラバス内容の点検を通して授業の計画・内容の検討・改善に取り組んでいる。	【長所】 各学生の研究の進め方・方向性等、修学の推進に貢献できている。	【長所】 各専修分野を中心としながら実施することによる、より専門的な評価・認定の向上を実現している。	【長所】 各学生に対する個別対応による学習成果の把握・評価の向上を実現している。	【長所】 定期的な点検による教育の内容・指導方法の改善・向上に寄与している。
	【特色】 授業の計画・内容の向上に繋がる。	【特色】 各学生の個別の状況に応じた修学の確保に繋がる。	【特色】 大学院生に対する専門知識の高度化・深化に繋がる。	【特色】 大学院生のテーマに合致した学習成果を適切に向上するプログラムを計画している。	【特色】 定期的な点検・評価による PDCA サイクルを通した教育の内容・指導方法の改善・向上が期待される
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ポストコロナへの対応には苦慮している。	【問題点】 コロナ禍により進捗の遅れが全般的に観られる。	【問題点】 コロナ禍による学習の遅滞等を加味した評価が困難。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 なし
	【課題】 さらに効果的な指導方法の確立が望まれる。	【課題】 複数の教員によるチームサポートの実現を構築するとともに、今般の状況に応じた教育体制の検討が急務。	【課題】 非常事態下における学習評価の理念・手法の確立が急務。	【課題】 新研究科移行に伴う、新たな授与方針の確認・確定作業が必要。	【課題】 さらなる充実を期すための創意・工夫。
根拠資料名	◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス、◆専攻３ポリシー	◆院生によるレポートおよびアンケート	◆学位論文審査に関する記録他	添付資料「中間・所信発表会プログラム」、◆専攻３ポリシー	◆「シラバス記載内容の第三者によるチェックについて（回答）」

2022（令和４）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	入学者選抜制度や試験科目等の見直しおよび問題の難易度に関する検討を実施している。入学者選抜にあたっては他大学からの受験者に対する考慮もしながら、公正に実施している。 Ⅰ期試験においては、進路が定まっていなかったり研究への魅力を感じている程度が低い学生も散見されたが、研究を積み重ねることで進学意欲が高まることも多いためⅡ期試験における受験希望者の扱いと入学希望者の発掘にも注力している。	入学者選抜試験時に点検・評価を実施するとともに毎年、学生の受け入れの適切性について点検・評価を実施している。学部学生や博士前期課程の学生に対する進学受入れの意欲向上に向けた専攻内での相互点検も実施している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 公平・公正な選抜制度の運用を実現できている。 社会情勢、経済状況に対応しながら制度・体制を整備することが大切であり、意識的に取り組んでいることは長所として捉えている。	【長所】 定期的な点検・評価による学生の受け入れに関する改善・向上に繋がる。
	【特色】 社会情勢、経済状況の変化に対応した柔軟な制度・体制づくりが期待できる。	【特色】 定期的な実施による PDCA サイクルを通した改善・向上が期待できる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 コロナ禍により、学部生時代の学習に遅滞があることから、大学院の選抜においてその程度をどのように加味するべきであるのかについて試行錯誤の段階にある。	【問題点】 心理的ストレスを有する大学院生の増加。心理カウンセラーによる対応を必要とする院生の把握と適切指導の判断。
	【課題】 問題点とした点については、その影響が今後数年間におよぶことが予想されるため、具体的な対応策を検討する。また、改組に伴う学位名称や分野の主たる領域、従たる領域を明確に理解してもらう広報戦略を課題として考えている。	【課題】 教員間で情報を共有しつつ、協力しながら具体的に解決していくことが必要。専攻内に教育点検の委員会を設置し、検討を継続する。
根拠資料名	入試説明会の開催 ◆大学院入試募集要項、HP 等、◆専攻３ポリシー	◆入試選考委員会実施記録等

2022（令和４）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　つなげている □　一部つなげている □　つなげていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	林学専攻教員組織の編成方針を作成し、公表している。 基本的に毎週実施している専攻会議において、随時実施している。	教員数が減少するなか、柱科目を中心に専任教員を配置し、不足を非常勤講師で補うなど適切に編制している。 研究室単位でバランスの取れた年齢構成に心がけている。 教員の授業負担に配慮しながら時間割編成するよう努めている。	教員の昇任は専攻教授会を中心に検討し、指導教授により構成される委員会にて適切に決定している。	研究室単位で発表会を行うなど、若手教員の FD 向上がみられる。 専攻独自に FD 研修会などは開催していないが、積極的に学内の FD 講習会に参加している。また、参加を推進している。 授業評価アンケート実施とその結果を適正に認識して学生指導している。	教員の研究業績、社会活動について専攻内で共有し、点検・評価することを奨励している。 若手教員指導体制が確立するよう意識した活動を計画している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教員組織の編成方針作成による編制を明確化している。	【長所】 専修分野に対応した教員組織の明確化に繋がる。	【長所】 会議を通した情報の共有・議論の展開に寄与	【長所】 会議を通した議論・検討の機会を確保できている。	【長所】 定期的な点検・評価による教員組織の改善・向上に寄与
	【特色】 フィールド調査・屋内実験等での研究指導を実施するなど、学生の学習と研究への貢献を実現しいる。	【特色】 学生の研究に繋がる指導が可能な教員配置を意識している。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。	【特色】 特になし。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし。	【問題点】 教員数の減少が教育の量的・質的な低下をもたらしつつある。	【問題点】 特になし。	【問題点】 雑務の増大が、教員間のコミュニケーションを阻害している。	【問題点】 特になし。
	【課題】 上記の取り組みの継続的な実施。	【課題】 研究室全体での研究・教育・指導を念頭にした教員配置計画を策定する。	【課題】 雑務の増大により論文の執筆活動が停滞している教員がいるため、論文執筆を促すための具体的な工夫が必要。	【課題】 効率的な事務作業等を検討し、充分なコミュニケーションを図る。	【課題】 若手教員の研究力向上のための検討を継続する。
根拠資料名	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表 大学院教員名簿、学生便覧、HP 等	専攻教員配置表、学生便覧、HP 等	専攻会議資料	専攻会議資料

令和４年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

研究科名　地域環境科学研究科
研究科委員長名　大林　宏也
専攻名　農業工学専攻

１．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　講じている □　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	☑　している □　一部している □　していない	□　行っている ☑　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業工学専攻博士前期課程では、農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者としての総合力を確立し、地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学における専門知識と、研究および論文作成手法を修得するための科目を体系的に配当し、コミュニケーション能力を増強できるカリキュラムを編成している。また、博士後期課程は、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力を確立し、農業工学の専門的課題を自ら解決できる能力を獲得させるため、問題抽出能力、分析能力、企画能力を養うことを目的とし、コミュニケーション能力や問題解決能力を増強できるカリキュラムを編成している。	専攻全体で行う行事では、学生、教員間の研究交流を重視し、円滑な情報交換により学習効果を高め、活性化する活動に重点を置いている。前期には博士前期課程・後期課程合同で研究発表会を実施し，研究の進捗状況を確認するとともに，他者の研究に触れさせることで教育指導効果を高めている。 大学全体で実施している大学院生研究発表会への参加を学生・教員の双方に促し、研究の相互理解を深めるよう取り組んでいる。	農業工学特別演習や農業工学特別研究については、主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもとに開催される中間発表や最終発表に基づいて、大学院担当教員全員で成績評価とともに単位認定を行い、学位授与の可否を決定している。特に博士論文の審査報告概要並びに審査報告会実施記録においては、主査が作成した後、全ての大学院担当教員が確認し、提出している。	博士前期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに、農業工学に関する専門知識と研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における技術開発や問題解決に役立てる能力を備えた学生に修士の学位を授与している。また、博士後期課程では、研究科が定める所定の単位を修得し博士論文を提出するとともに、農業工学に関する高度な専門知識と優れた研究能力を有し、国内のみならず海外の現場での農業工学の専門領域における具体的な問題解決に資する高度な能力を備えた学生に博士の学位を授与している。	大学院生による授業評価をセメスターごとに実施しており、その結果を受けて優先的に対応すべき課題の抽出と分析を行い、改善計画を提出しています。併せて、作成した改善計画に基づき、指導・授業を実施し、次回の授業評価で対策の効果を検証するサイクルを継続している。 今年度も農業工学専攻会議を毎週開催し、学生教育・指導に対して迅速な対応を取り改善・向上を図った。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・博士前期課程では農業工学に係わる技術者、研究者あるいは教育者として、また博士後期課程では、農業工学に係わる研究者、高度な技術者あるいは教育者としての総合力の確立を目指している点。	【長所】 ・別の専攻の学生との交流が活発になり、研究生活での学生の孤立が避けられる点。	【長所】 ・学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、成績評価とともに単位認定を行い、学位授与を決定している点。	【長所】 ・農業土木および農業機械、環境情報分野の学問を基軸として、国内のみならず海外の現場での技術開発・問題解決と学術的な研究を両立できる高度な能力を持った人材の輩出を目指している点。	【長所】 ・受講生である大学院生の評価に基づいた改善計画を立案できている点。
	【特色】 ・地域資源利用学、生産環境・計画学、施設工学、農業生産システム工学の４つの専修で構成し、専修ごとに高度な専門教育を行っている点。	【特色】 ・多くの専攻の学生が一堂に会することから、大学全体での一体感が育まれる点。	【特色】 ・専攻内にある４つの専修が合同で学位審査を行っていることから、幅広い見地で評価が行われている点。	【特色】 ・主査と副査のみならず、大学院担当教員全員の出席のもと、中間発表や最終発表を実施し、学習成果とともに研究成果を評価している点。	【特色】 ・1 専修あたりでの学生数が少ないことから、専修全体でのイベントにおいて学生、教員間での交流を密にすることを心掛けている点。

令和４年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・受講生の少ない科目については、回答した院生を特定できてしまうため、回収率が低く、また、回答内容の信憑性が低くなっている可能性がある点。
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・大学院授業評価の方法。
根拠資料名	・開設科目一覧（A1-①-1） ・カリキュラムツリー（A1-①-2, 3） ・シラバス(例)（A1-①-4, 5）	・大学院生研究発表会（A1-②-1, 2） ・中間発表会（A1-②-3） ・修士論文発表会（A1-②-4）	・学位論文審査報告会実施記録(例)（A1-③-1）	・中間発表会（A1-②-3） ・修士論文発表会（A1-②-4）	・授業評価アンケート結果（A1-⑤-1, 2） ・授業改善計画書（A1-⑤-3） ・シラバス第三者チェック（A1-⑤-4） ・専攻会議議事録一覧（A1-⑤-5）

令和４年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	農業工学専攻では、以下の学生受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制（推薦入試、一般入試等）を適切に整備し、公平に入学者選抜を実施している。	満足度評価を年度末に実施しており、その結果に基づいて学生受け入れ時の事前相談や説明会内容の適切性について評価を行っている。 さらにその結果を踏まえて、定期的に学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）の見直しを行っている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・様々な入学者選抜制度があり、多様な人材の受入を目指している点。	【長所】 なし
	【特色】 ・JICA が斡旋している PEACE や ABE イニシアチブ、SDGs グローバルリーダーなどのプログラム参加留学生の受入れの他、国際協力経験者入試を行うなど海外で活躍できる人材の育成に努めている点。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・工学分野では求人が多く、就職率が高いため、日本人学生の進学率が低い点。	【問題点】 なし
	【課題】 ・優秀な日本人学生の進学率を向上させること。	【課題】 ・優秀な日本人学生の確保につながる受入れ方法の確立。
根拠資料名	・募集要項（A2-①-1） ・大学院入試説明会（A2-①-2, 3） ・入試 HP（a2-①-3）	・満足度アンケート結果（A1-⑤-1） ・授業改善計画書（A1-⑤-3）

令和４年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☐　している ☑　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	教員組織の編制に関する方針として、農業工学専攻では、以下を明示している。 農学研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに、農業工学分野における保有する博士学位や高度な専門能力及び論文作成指導能力に加え、国際化に対応しつつ、人類が直面する農業農村開発と自然環境の保全との狭間で生じる地球規模の諸問題の複雑化に合わせて、多様な教育・研究を展開する教育体制を構築し、建学の精神「人物を畑に還す」のもと、国内だけでなく、世界各国、地域で活躍する優れた高度な人材を育てることを目的として、農業工学分野における高度な専門的能力と学識を備えた研究者及び技術者を養成する研究室体制を構築し、その維持・向上に努めている。 1. 法令（大学院設置基準等）で定められている要件を満たす教員 2. 本専攻の「教育研究上の目的」、「教育目標」及び「３つの方針」を十分理解し、それらに対応する能力と意欲を備えている教員 3. 農業工学分野における高い研究業績を有するとともに、本専攻の構成員として各種運営業務に積極的に取り組める教員	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制している。	資格審査基準等に則り、適切に教員の募集、採用、昇任等を行っている。 人事は学部で行っており、2022 年度には１名の新規採用のための公募を実施していた。 昇格については学科推薦者はいなかった。	修士論文･博士論文中間発表会や年度末の修士論文発表会、博士論文専攻内発表会や公開発表会など、専攻全教員の参加のもと実施することで、研究視野の拡充に努めている。 学部国際化委員会が主催するコロキウム等の開催により，国際感覚を醸成するとともに，共同研究のシーズを探索する場を提供している。	東京農業大学自己教育評価において、定期的に教員個人の点検･評価には取り組んでいる。 教員組織の適切性については、教育システム評価委員会により点検・評価の機会がある。2022 年度は開催しなかった。改善･向上に向けた取り組みは専攻委員会において検討することになっている。

令和４年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 女性教員や外国国籍の教員の採用を積極的に進め、多様性を確保しつつある点。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・多様な研究に触れる機会の増加 ・共同研究の可能性の増加 ・英語に接する機会の向上	【長所】 なし
	【特色】 英語が堪能な教員を拡充し、留学生の満足度を高めるのと同時に、日本人学生の国際意識の高揚に努めている点。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・研究交流が活発化し、研究者としての資質が向上する。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・コロキウムでは時差の問題, 参加者が限定的	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 人事は学部で動いている。大学院では教員組織の編成結果を明示しておらず, その必要性があるのか検討の余地はある。	【課題】 なし	【課題】 ・継続的かつ魅力的なテーマの設定。	【課題】 なし
根拠資料名	・教員組織の編成方針（A3-①-1, 2）	・指導教授一覧（A3-②-1） ・所属教員一覧（A3-②-2）	・ロボ研公募文（A3-③-1）	・中間発表会（A1-②-3） ・修士論文発表会（A1-②-4） ・コロキウム等（A3-④-1～6）	・自己教育評価依頼（A3-⑤-1）

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　地域環境科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名　　大林宏也
学科名・専攻名　　造園学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき，各学位課程にふさわしい授業科目を開設し，教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し，効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価，単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容，方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また，その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	2021 年度からの新体制（地域環境科学研究科造園学専攻）に基づき，新カリキュラムを施行した。専攻内における専門性を高めるとともに，造園学の幅広さと社会的位置づけなど体系的理解度を向上することを強化した。	研究の進捗状況に応じ，博士前期・後期課程の発表会，検討会，意見交流会を実施し，教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにしてある。グリーンインフラに関わる学部プロジェクトでの交流会を通じて関連研究の動機付けの一助となった。	専攻内の教員が成績評価を行い，学位授与に際しては研究発表内容をもとに専攻内会議を実施して，十分な議論のもとに実施した。	造園学専攻博士前期課程での学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）は，次の通りである。「人間と自然との共存」を基本とした合理的で快適な土地空間を創造あるいは保全し，秩序づけることのできる人材を輩出するため，研究科が定める所定の単位を修得し修士論文を提出するとともに，以下の能力を備えた学生に修士の学位を授与します。（1）造園学に関する専門領域において，確かな知識と技術，研究・デザイン能力を備えている。（2）快適環境を具体化するための問題設定・解決能力を備えている。（3）論文の執筆や口頭発表を行う能力，さらにプレゼンテーションなどを通じた多様な発信・表現力を有している。（4）科学者としての倫理観を理解し，その専門性に基づいて広く社会への責任を果たそうとする意欲と能力を有している。 　研究の進捗状況に応じ，博士前期・後期課程の発表会，検討会，意見交流会を実施し，教員・院生相互の状況把握や問題点の確認などを積極的に取り組めるようにした。また専攻内の教員が院生の学習成果を個別に把握しており，研究について学会等での発表，投稿を積極的に行うように指導している。	授業の実施内容等について，少人数であるため大学院生との話し合いから進めることができた。実験・演習スペースについては，サイエンスポート 3 階に共通演習室 A, B, C を設けた。これにより，大学院生が実験や研究を行うことのできる環境を整えた。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 造園学の社会的役割を再認識し，専門性を深化してきた。	【長所】 国際感覚および現場感覚を養うことができた。本学造園学専攻の大学院生の大きな刺激になり，交流も深めることができた。	【長所】 多面的な視点で評価できる。	【長所】 学位授与方針により，学習成果の評価を適切に運用した。	【長所】 定期的な点検を行うことにより，専攻全体の学習状況や研究実績の状況確認が可能となった。

	【特色】 造園学のもつ広範な分野の理解とそれに基づいた専門分野の特徴を理解することができた。	【特色】 大学院生自身の専門領域の確認や妥当性の検証ができた。	【特色】 多様な視点からの厳正な評価を行うことができた。	【特色】 明瞭かつ公正な評価を行うために常に確認をした。	【特色】 大学院生からの意見等も反映させ，適切性を可能な限り保てるよう努力した。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 博士前期課程の現行カリキュラムについて，専門性と総合性のバランスを図る検討が必要である。	【問題点】 持続的な実施ができるようにする。	【問題点】 異分野の研究の場合，特に学位授与に際しては，検証が難しい場合も考えられる。	【問題点】 特になし	【問題点】 研究環境，特に実験・演習スペースが不十分であり，さらなる確保の検討が必要である。
	【課題】 2021 年度から開始された新カリキュラムであるため，その成果に時間をかけて点検する。	【課題】 年々進む国際化へ対応できるような意識改革と実施が必要である。	【課題】 発表会，検討会，意見交流会などを通じ，今まで以上に論文の検証を継続的に実施することが必要と考えられる。	【課題】 より安定した明瞭かつ公正な評価の実施を行う。	【課題】 サイエンスポートにおける実験・演習スペースについては，継続的な検討を行い，より良い研究環境の確保に努めたい。
根拠資料名	大学院カリキュラム（2023Feb17M-syllubus01） 専攻３ポリシー https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/about/policy/polcy-inquiry600/polcy-landscape/	発表会，検討会，意見交流会実施記録	大学院生中間発表会要旨（造園学専攻発表会要旨集，発表会要旨集，造園学専攻 D2M1 中間発表会要旨集，造園学専攻中間発表会要旨集） 04【海外協定校との共同研究】研究成果概要（2022 年度）	専攻３ポリシー https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/about/policy/polcy-inquiry600/polcy-landscape/	サイエンスポートの研究室配置

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき，学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し，入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また，その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	造園学専攻博士前期課程は，造園学に対する興味と意欲を有し，都市から自然地域における快適環境をもたらすための知識と課題解決能力をもって研究を推進できる人材を育成します。そのため，本専攻では次のような学生を求めています，としている。（１）造園学関連分野の学修が可能な四年制大学修了程度の学力を有している。（２）国内外における学修や，研究活動を実施する上での基本的な語学・文章・表現力を有している。（３）協調性やコミュニケーション能力を有するとともに，研究環境でのリーダー性を発揮できる能力を有している。（４）研究者，教育者，技術者として豊かな地域社会と社会資本の形成に貢献しようとする明確な問題意識と，学修に対する強い意欲を有している。 　入試説明会や論文発表会への学部生の参加を促す一方，試験問題の開示を行い，公正に実施している。また，事前の入試説明会をⅠ期，Ⅱ期それぞれ複数回実施し，公正な入試の実施に努めた。	Ⅰ期およびⅡ期の２回にわたる入試時だけでなく，受験前には卒業論文を通し必ず指導教員に相談するように指導している。また専攻内教員間で議論を行い，適切性について十分な議論と取り組みを行っている。学外からの志望者には研究生になって学習する機会をつくっている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 早い時期から大学院進学に関する情報をあたえることにより，より意欲の高い学生を確保することが可能となる。	【長所】 教員が個人別に丁寧に指導できている。
	【特色】 学部生が早い時期から大学院の専門教育の実態や研究をめざす人材を発掘することができる。	【特色】 学力のみならず面接を実施することで，応募者の学生の研究に対する意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 本学学内学部生の進学率も低い。これは高い学部生の就職率によるものである。	【問題点】 留学生や海外からの応募者や受験相談者について，研究能力が十分であるかなどの検証が難しいケースが見受けられた。
	【課題】 社会とのバランスをみながら，長期履修制度などを利用した社会人入学制度の案内なども積極的に行う。また学部生に対しては，大学院教育や研究の魅力を，講義などを通して積極的に行う。	【課題】 受験希望者(特に学外からの留学生受験者)に対しては，可能な限り複数回，対面式で早い時期から相談などを行い，研究能力や修学の意思確認などをより密に実施することが重要であると思われる。
根拠資料名	大学院入試募集要項 https://www.nodai.ac.jp/application/files/3416/3722/1986/20224_211118.pdf 2023 入学志願者数 入試過去問題 HP(https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/admission/past-test/)	指導教員の連絡先の開示 https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/admission/application/ 学科教員会第(20230315)

	専 攻 3 ポ リ シ ー　https://www.nodai.ac.jp/nodaigs/about/policy/polcy-inquiry600/polcy-landscape/	

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき，教育研究活動を展開するため，適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集，採用，昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し，教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また，その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価（☑を記入）	☑ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☑ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☑ 一部行っている ☐ 行っていない	☑ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☑ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する現状説明	専門分野ごとに，適切な人材が配置されるように定期的な会議を開き議論している。また，大学の理念・目的，研究科の教員組織の編成に基づき，専攻の教員組織の編成方針を作成し，本学の大学案内やホームページ上で公開している。	学部再編(2018 年度)に伴う教員数の削減により，新規採用が厳しくなっている。 他分野に追随できるよりレベルの高い研究力をもつ大学院指導教授有資格者の確保が必要である。	地域環境科学研究科の設置の開始に伴い，定期的に大学院指導教授会議を開き，適切な教員配置について議論した。1 名の指導補助准教授への昇格の承認を得た。	国際的視野によって，本学造園学専攻の教育・研究方針をどうあるべきか，常に議論し，その方針に基づいた人員配置ができるように努めた。また学部プロジェクトなどを行い，お互いの研究力を高めている。	地域環境科学研究科の設置および新研究室体制の開始に伴い，定期的に大学院指導教授の会議を開き，適切な教員配置について議論した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 複合的な専門指導体制が構築できる。	【長所】 学部における教員編制の充実化に影響する。	【長所】 教員の採用，昇格に伴う教育研究活動の展開が可能となる。	【長所】 学部において，研究・教育力の高い嘱託教授の採用も図るように努め，今後の大学院教育の在り方を探った。	【長所】 学科内指導教授会議での議論を行っている。
	【特色】 専門性の異なる人材の配置で多様な教育・研究体制を構築可能である。	【特色】 新たな教員確保に伴う大学院教育の充実化を可能とする。	【特色】 教員の採用，昇格に伴う専攻内の教育研究活動の活性化が図られた。	【特色】 2021 年度より新研究室体制に移行し，さらなる国際化を図る。	【特色】 議論の末，2021 年度より新研究室体制に移行し，教員組織の適切性が図られた。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 今後専攻内の教員数を十分に確保することが困難な場合が想定される。	【問題点】 今後，専攻内の十分な教員数の確保がさらに困難な場合が想定される。	【問題点】 新研究室体制の検討により指導体制が整備されつつあるが，造園学を修めた専門家の減少が危惧されている。	【問題点】 より研究・教育力が高まる大学院指導教授の採用が必要である。特に国内の造園の特色を発信できる国際レベルの研究力が不足している。	【問題点】 学内での活動やプロジェクトの成果等の評価判定が難しい。
	【課題】 大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた研究環境の充実を図る必要性がある。	【課題】 新研究室体制により，大学院指導教員の資格を有する教員確保に向けた研究環境の充実を図ると共に，人事体制の微調整が必要であると考えられる。	【課題】 より研究・教育力が高まる大学院指導教授の採用が必要である。	【課題】 より研究・教育力が高まる大学院指導教授の採用が必要である。	【課題】 新研究室体制の後，従来の体制による進め方にとらわれない，新規性の高い教育方法を見いだす必要がある。
根拠資料名	学科（専攻）の教員体制 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/supervisor/	学科（専攻）の教員体制 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/supervisor/	学科（専攻）の教員体制 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/supervisor/	学科（専攻）の教員体制 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/supervisor/	学科（専攻）の教員体制 https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/original/graduate/japanese/supervisor/

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名　地域環境科学研究科
学部長・研究科委員長名　大林　宏也
学科名・専攻名　　地域環境科学専攻

1．教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している □　一部している □　していない	□　講じている ☑　一部講じている □　講じていない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない	□　している ☑　一部している □　していない	☑　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	専攻設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」および事前相談資料「③教育課程等の概要」,「⑤授業科目の概要」に記載したカリキュラムポリシーおよび授業等科目群にしたがって，教育課程を体系的に編成している。	講義科目と実験・演習科目との関連性を説明し，必要に応じて講義資料等の見直しを指導している。 専攻会議を定期的に開催し，専攻教員間で情報を共有し，適切な指導が行われているかを確認している。	シラバスに成績評価基準を明記し，それに従った評価および単位認定を行っている。修士論文については現在，修士 1 年次のみの在籍であり，定期的に中間発表会を実施し，研究の進捗状況の確認を行っている。	ディプロマポリシーを考慮した履修モデルに基づいた科目履修を指導している。 修士論文などの総合的な科目については，定期的に中間発表会を実施し，研究の進捗状況の確認を行っている。	専攻教員全員が参加する専攻会議において教務関連事項について審議し，適宜改善を行っている。今年度は，修士 1 年次の中間発表会について，詳細な実施計画を策定した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 「地域づくりを担うリーダーの育成」を意識した教育を実施している。・	【長所】 シラバスに沿って実施しているため，長所や特色は特にない。	【長所】 シラバスに沿って実施しているため，長所や特色は特にない。	【長所】 指導教員のもと，研究の進捗を適宜把握し，記録に残すよう努めている。	【長所】 中間報告会および最終報告会は公開形式とし，研究分野を超えた質疑や批評の機会を積極的に設けている。
	【特色】 講義科目と実験・演習科目を通年で適宜組合せ，実践的教育を行っている。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため，長所や特色は特にない。	【特色】 シラバスに沿って実施しているため，長所や特色は特にない。	【特色】 ディプロマポリシーを意識し，地域づくりに資する人材育成を行っている。	【特色】 講義科目と実験・演習科目を通年で適宜組合せ，実践的教育を行っている。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 コロナ禍の沈静化に伴い、野外フィールドを有する研究では、調査活動の制限を段階的に解除しつつ実施した。	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 授業評価アンケートの結果を教育指導の改善に積極的に活用する。
根拠資料名	学生生活ハンドブック［カリキュラム］ 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	シラバス 令和 4 年度　地域創成科学専攻　専攻会議議事録	シラバス	履修のてびき 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和 4 年度　地域創成科学専攻　専攻会議議事録

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

２．学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑□　している □　一部している □　していない	☑□　行っている □　一部行っている □　行っていない
点検項目に対する現状説明	・理系，文系を問わず，「地域づくり」に積極的に取り組める学生を広く募集し，学力選抜試験を行っており，その結果を公表している。 ・英語については「筆記試験」と「TOEIC スコアの利用による筆記試験との同等性の確保」の二本立てとし，出願者に選択させている。 ・今年度は，令和 5（2023）年 4 月に開設される博士後期課程の入学選抜試験（社会人特別選抜試験：研究計画の説明を主体としたプレゼンテーションおよび口頭試験）を初めて実施した。	入試選考会議は全教員が参加することとしており，学生の受け入れの適切性は担保されている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 大学案内では，「地域づくり」をキーワードとした専攻紹介を行い，アドミッションポリシーを意識させている。	【長所】 理系，文系を問わず，幅広い人材を募集している。
	【特色】 特になし	【特色】 「地域づくりの担い手となるリーダー」を目指す学生を募集している。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 令和 5 年（2023 年）4 月に開設される博士後期課程の定員確保（1 学年 2 名）に向け，ひき続き，広報活動を積極的に行う。	【課題】 特になし
根拠資料名	大学案内 2021［2022 年度入試制度］ 教育研究上の目的・教育目標・3 ポリシー	令和 4 年度 地域創成科学専攻　専攻会議議事録

2022（令和 4）年度　基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式１

３．教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　している ☐　一部している ☐　していない	☑　行っている ☐　一部行っている ☐　行っていない	☐　つなげている ☑　一部つなげている ☐　つなげていない	☐　行っている ☑　一部行っている ☐　行っていない
点検項目に対する現状説明	大学及び本研究科の教員組織の編制方針を踏まえるとともに，本専攻の教育研究上の目的，教育目標及び３つの方針を十分理解し，それらに対応する能力と意欲を備えている教員を配置する，としている。	地域創成科学を構成する各々の学問領域において，優れた教育能力，研究能力を備え，地域創成科学の発展に貢献できる教員を配置している。	退職教員の後任人事を公募し，助教（任期付）の正式採用に至った。 准教授位以下の教員に対しては，定期的に業績調査を行い，専攻教授会において審議している。 本年度は大学院指導教授資格に関する人事（1 名）を行った。	専攻教授会が中心となり，海外留学の機会を通じた新たな研究シーズの発見，これまでの研究領域の応用展開が期待できる若手教員に対して，積極的に海外留学を認めている。来年度は准教授 1 名が依命国外留学の予定である。	退職予定者の後任人事案件が生じた場合，専攻教授会において，単なる後任補充にとどまらず，専攻の将来を見据えた教育研究分野の人材について審議し，枠取り申請ならびに教員公募の要件を設定している。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教員組織の編制方針に記した通りであり，長所や特色は特にない。	【長所】 地域創成科学専攻の人材育成目標の達成と円滑な学科運営を重視している。・	【長所】 年齢に関係なく，十分な業績を有し，学科運営に積極的な人材を昇格対象としている。	【長所】 1 研究室あたり 3 名の教員を配置し，留学教員不在時の支援体制を整えている。	【長所】 人事の固定化に陥ることなく，時代の要請に応じた適材適所の人材を確保することができる。
	【特色】 教員組織の編制方針に記した通りであり，長所や特色は特にない。	【特色】 「地域づくり」という幅広い研究領域に対応している。	特になし	【特色】 研究室単位，専攻単位での教育研究指導体制により，留学教員不在時の支援体制を整えている。	【特色】 特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし・	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 大学院指導資格を有する教員の安定的な確保に向け，今後も定期的に業績チェックを行う必要がある。	【課題】 特になし・	【課題】 特になし
根拠資料名	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ．教員組織の編成の考え方及び特色	教員組織の編制方針 設置認可申請書・届出書「設置の趣旨等を記載した書類」 オ．教員組織の編成の考え方及び特色	令和 4 年度　地域創成科学専攻　専攻教授会議事録	入江准教授（当時，現教授）留学申請書・同意書（平成 30 年度提示資料に同じ）	令和 3 年度　地域創成科学専攻　専攻教授会議事録

2022（令和４）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　　農学研究科・地域環境科学研究科
学部長・研究科委員長名　坂田洋一・大林　宏也
学科名・専攻名　　林　学　専　攻

１．教育に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	大学院の講義・実験実習における成績の評価に関する標準化	AP および DP に対応した大学院生の研究成果の構築とプレゼンテーションと論文発表力の向上	
実行サイクル	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	年サイクル（平成　　年～　　年）
実施 スケジュール	①大学院成績評価の現状と課題の明確化 ②上記①を踏まえた実施方策（改善点）の検討 ③上記②の実施方策に沿った評価実施と課題の再確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	①専攻開催の研究成果報告会（所信・中間・最終）の実施方法の検討 ②上記①を踏まえた、試験研究計画と実施・プレゼンテーション内容評価方法の提案 ③上記②の評価方法の実施と効果の確認 ④目標達成に至るまで上記②と③のプロセスを毎年度実施	
目標達成を測定する指標	①相対評価を実施する教員数（比率） ②相対評価を実施する科目数（比率）	①全担当教員による改善度評価 ②参加学生の満足度評価	
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	計画当初は、令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年にも延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	計画当初は、令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年にも延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	【長所】 ・
	とくに無し。	とくに無し。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 ・
	【課題】 さらなる評価の標準化を検討。	【課題】 発表機会の確保に努める。	【課題】 ・
根拠資料名			

2022（令和４）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	大学院（博士後期課程）研究支援制度への対応	森林科学、木質科学分野を対象とした専攻外研究者との共同研究成果の蓄積(研究連携の推進)	
実行サイクル	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	年サイクル（平成　　年～　　年）
実施 スケジュール	①現行の大学院博士後期課程研究支援制度への学生確保の確認 ②次年度に向けた対象学生・対象テーマの選定 ③制度への申請準備支援 ④制度への申請	①競争的資金等を利用した専攻外研究者との共同研究の検討、役割分担の明確化、研究計画・実施の策定 ②競争的資金等の獲得および日本学術振興会特別研究員採択に向けた活動・行動 ③資金・予算獲得できた研究の実施 ④成果の取りまとめと社会化	
目標達成を測定する指標	①（博士後期課程等）対象学生に対する応募者数比率	①競争的資金等の獲得の有無 ②研究成果の学会報告数、論文投稿数、出版著作数	
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更	☐　達成した ☐　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年も延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年も延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	【長所】 ・
	とくに無し。	とくに無し。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 ・
	【課題】 さらなる支援体制の充実に努める。	【課題】 ポストコロナ・ウィズコロナ下での新たな取り組みを模索。	【課題】 ・
根拠資料名			

2022（令和４）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①	②	③
目　標	林学専攻の整備	大学院生の研究・生活基盤の確立支援	インターンシップ科目の活用と進路指導の強化
実行サイクル	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）	7 年サイクル（平成 29 年～令和 4 年）
実施 スケジュール	①現行研究科の検討と問題点の抽出 ②森林総合科学科の教育課程改革との関係性の検討 ③上記①と②を踏まえた専門分野の見直し（内容、名称、科目等） ④専攻主任会議および農学研究科委員会への議題提出	①大学院生の生活実態の把握 ②大学院生向けの研究費・奨学金等の情報収集 ③大学院生への奨学金申請の促進	①大学院入学時の早い段階で大学院修了後の進路について検討させ、進路目標の設定とそれに向けた具体的計画を策定させる。 ②インターンシップ科目の受講とインターンシップへの積極的参加を指導する。 ③適宜、指導教員による進路相談を実施する。
目標達成を測定する指標	①　令和３年４月に新たな研究科が整備されること	①学外奨学金応募者数 ②奨学金応募者に占める奨学金受給者割合 ③外部の研究支援制度（学振等）への応募支援	①就職希望学生に対するインターンシップ実施者数
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年にも延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年にも延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。	令和２年を期間とする実行サイクルであったが、コロナ禍への対処として令和４年にも延長した。 概ね達成したと見做すことができるが、さらなる検討も必要。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	とくに無し。	とくに無し。	とくに無し。
	とくに無し。	とくに無し。	とくに無し。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。	【問題点】 とくに無し。
	【課題】 新研究科移行による正負の影響の洗出しと対策の検討。	【課題】 さらなる充実に努める。	【課題】 さらなる充実に努める。
根拠資料名			

令和４年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

研究科名　地域環境科学研究科
研究科委員長名　大林　宏也
専攻名　農業工学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	博士前期課程におけるシラバスに基づいた大学院授業の実施
実行サイクル	1 年サイクル（令和４年度）
実施 スケジュール	前期　４月~7 月　シラバスに沿った院授業の実施 後期　９月~1 月　シラバスに沿った院授業の実施 12 月~1 月　令和３年度院授業シラバスの策定
目標達成を測定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・シラバスに基づいて授業が行われたが，アンケート回答数が少ないため目標が達成されたかどうかは不明である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】 ・シラバスに則って授業を実施することで、学習・到達目標や授業科目相互の関係が明確になり学生の理解が促進される。教員は教育内容の評価・点検が容易になり授業の質の向上につながる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・履修者が少ない授業科目が多く、アンケート回答者が特定されてしまう場合がある。 ・演習・実験科目で複数の履修者がいる場合、学生の研究テーマと授業内容とのかい離がおこることもあり、個別に授業を実施した方がよい場合があるが、教員の負担となる。
	【課題】 ・授業を適切に評価する仕組みは、現状以外は見当たらないため、現行を継続する。回答者数の増加を図る。
根拠資料名	・シラバス(例)（A1-①-4, 5） ・授業実施報告書（B1-①-1） ・授業評価アンケート集計結果（A1-⑤-1, 2）

令和４年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	博士後期課程の大学院生に対する国際会議での発表の推奨
実行サイクル	1 年サイクル（令和４年度）
実施 スケジュール	４月から適時、農業工学分野における国際会議の情報を博士後期課程の大学院生に周知し、参加発表を促していく。
目標達成を測定する指標	学生１人あたりの国際会議での発表回数
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・８名の所属学生のうち一部の学生が国際会議で研究発表を行った。 ・博士前期課程の学生も多くが発表を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・外国人留学生が多いため、国際会議での発表により世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材教育が期待できる。
	【特色】 ・世界の動向を見据えた行動ができる素養を持った人材の輩出が可能になる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・渡航費が負担となる。経済的な支援があれば、国外に限らず国内でもより多くの研究発表の機会が与えられる。
	【課題】 ・東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラムなど、旅費の支援が課題である。 ・後期課程に限定せず、全学生に発表を推奨するようにする。
根拠資料名	・海外研究発表支援採択者（B2-①-1）

令和４年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	文化的背景を踏まえた専攻内での国際交流の活性化
実行サイクル	1 年サイクル（令和４年度）
実施 スケジュール	9~10 月に専攻内でイベントを開催する。
目標達成を測定する指標	参加者を対象としたアンケート結果
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・オンラインでのコロキウムを開催し、教員および学生が発表を行った。アンケートは実施しなかった。 ・懇親会を兼ねた情報交換会は本年度も実施できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・
	【課題】 ・新型コロナウィルスの沈静化に伴い、対面での活動が活発化することを期待する。
根拠資料名	・コロキウム等（A3-④-1～6）

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　地域環境科学研究科（農学研究科）
学部長・研究科委員長名　大林宏也
学科名・専攻名　造園学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	実学主義，実学教育をもとに，国際的視野により，造園学の視点から「人間と自然との共存」を基本とした合理的で快適な土地空間を，科学的に創造あるいは保全し，体系化を図ることのできる人材の育成。
実行サイクル	2 年サイクル（令和 2 年 4 月～4 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の終年度）
実施 スケジュール	専攻内研究発表会を定期的に行い，研究内容，発表内容の向上を図る。 国際感覚を養うため，造園調査法（演習）等のカリキュラムによる国内外の造園関連大学との交流を実施する。
目標達成を測定する指標	定期的な大学院生の研究発表会における相互の意見交換，アドバイスに対する応答
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	オスナブリュック応用科学大学において 4 大学，計 40 人の大学院生が参加した国際ワークショップ(International Workshop LA Lengerich22)が開かれ，本専攻の 8 名の大学院生が参加した。一方，学部プロジェクトを通して，オスナブリュック応用科学大学だけでなく，北京林業大学，上海交通大学，フィリンピン大学，慶北大学等と研究情報の交換を行うことができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 大学院生が渡独し，海外の大学生と熱心に議論し，発表もできた。対面による発表会などを通して活性化することができた。
	【特色】 国際ワークショップへ出席し，コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高めることができた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 経済的側面がある。
	【課題】 共同研究としての継続性と助成金の確保が必要になる。

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

根拠資料名	大学院生中間発表会要旨（2022 造園学専攻発表会要旨集，2022D2M1 発表会要旨集，造園学専攻 D2M1 中間発表会要旨集，造園学専攻中間発表会要旨） 04【海外協定校との共同研究】研究成果概要（2022 年度）

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	豊かな地域社会と社会資本の形成に貢献できる人材の養成を目的とし，大学院生の研究意欲の向上と修士論文，博士論文の質的向上を図る。
実行サイクル	2 年サイクル（令和 2 年 4 月～令和 4 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の終年度）
実施 スケジュール	大学で開催される研究発表会への参加，国際学会誌への投稿，国際学会のワークショップへの出席・発表，造園学会全国大会（5 月に実施）の他，関連学会への投稿数を増やす。
目標達成を測定する指標	大学で開催される研究発表会への投稿，国際学会誌への投稿数，国際学会のワークショップへの出席・発表数，国内造園関係学会での口頭発表・論文投稿数。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	全大学院生が大学で開催される研究発表会で発表した。大学院生 8 名が国際学会ワークショップに対面によって参加した。一方で，日本造園学会全国大会，技術報告集，関東支部大会における大学院生による発表の増加を図った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 対外的な発表件数の増加を目標としている。
	【特色】 国際化が叫ばれている中，日本の造園学の特徴を引き出す。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 専門学（造園）に関わる国際学会やワークショップが年々増加している中，その重要性や意義について十分に啓発されていない。
	【課題】 経費等も勘案しながら国際学会（ワークショップ）への参加数も今後増やしていく。
根拠資料名	◆発表会，検討会，04【海外協定校との共同研究】研究成果概要（2022 年度） ◆学会等での発表，投稿実績 Norma G. Medina, Kojiro Suzuki, and Satoru Tanaka (2023) Response of native plant, *Ardisia pyramidalis* (Cav.) Pers. to alkaline soil condition for use in urban landscape in Manila City, Metro Manila, Philippines. Jour. Agri. Sci.,

	Tokyo Nogyo Daigaku. Jan. 20, 2023 受理 Nanako Killmann, Norma G. Medina, Kako Matsunaga, Kojiro Suzuki, and Satoru Tanaka (2022) Relationship between the greenspace area and number of plant species in the urban area of Yokohama, Japan. Eco-Habitat 28, vol.1,5-18. Nanako Killmann, Fumitaka Nishino, Kojiro Suzuki and Ian D. Rotherham (2022) Characteristics of urban greenspaces based on analysis of woody plants in Yokohama City, Japan. Landscape and Ecological Engineering Volume 18, issue 2. 221 – 238. doi.org/10.1007/s11355-021-00493-4 Ryuki Tachikawa, Yoichi Kunii(2022)：Comprehensive quantitative understanding of the landscape using TLS point cloud data, Int. Arch. Photogramm. Remote Sens. Spatial Inf. Sci. XLIII(B2), pp.297-302 古賀大誠，根岸尚代，國井洋一 (2022) TLS 点群データを用いた戦災樹木に対する焼焦げの定量化手法と被災推定への応用，日本測量協会応用測量論文集(33), pp.47-56 尹静一・福岡孝則・李玉紅ほか(2022)アジア・モンスーン地域におけるグリーンインフラの実態と枠組みに関する研究―上海黄浦地区を例として―,日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集, p.117

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	国際的視野による造園学の産・官・学の連携
実行サイクル	2 年サイクル（令和 2 年 4 月～令和 4 年 3 月）の 2/2 年目（実行サイクル年の初年度）
実施 スケジュール	グローバル時代の多面的な地域環境問題の解決に果敢に挑み，自然と共生する地域づくりに貢献できる能力を養うために，フィールドワークなど（国内外）を通じて授業・研究に双方向の視点で行う。
目標達成を測定する指標	海外協定校との交流(共同開講授業への出席)数，産，官とのプロジェクト数，教育・研究成果の HP を通じての外部発信など。
自己評価 （☑を記入）	☑　達成した □　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	産官と連携しながら造園科学科 100 周年事業に基づく伝統技術の継承（教育）を行った。またドイツオスナブリュック応用科学大学で開催された 4 か国の参加によるワークショップに参加し，発表も行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 国際化を図りつつ，フィールドワークのあり方や授業・研究の充実を図った。
	【特色】 学部間協定校との MOU 締結後，教育・研究に活かすことのできた実質的な成果である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の理解はまだ十分とはいえなかった。
	【課題】 国際化を視野に入れた産・官・学の連携の現状の把握と啓発が必要である。
根拠資料名	04【海外協定校との共同研究】研究成果概要（2022 年度） オープンカレッジ実施報告 HP 100 周年記念事業の案内

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

学部・研究科名　地域環境科学研究科
学部長・研究科委員長名　大林　宏也
学科名・専攻名　地域創成科学専攻

１．教育に関する総合的事項

	①
目　標	修士課程完成年度（開設２年目）の今年度は，昨年度にひき続いて，シラバスに基づいた院授業を着実に実施する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和４年度）
実施 スケジュール	前期　４月~7 月　シラバスに沿った院授業の実施 後期　９月~1 月　シラバスに沿った院授業の実施 　　１月~2 月　令和３年度院授業シラバスの策定
目標達成を測定する指標	大学院生を対象としたアンケート結果
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) アンケート結果から，学生は積極的に授業に取り組んでおり，出席状況も良好である。 (2) 授業の内容や方法に関しては，すべて質問で高い評価を得ている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・様々な地域との連携実績があること、学生定員数が少ないこと、各教員の専門分野が多岐に及ぶこと、などを積極的に活用することによって、地域創成科学専攻ならではの教育が可能となる。
	【特色】 ・現地でのフィールド調査に加えて、研究室での議論･取りまとめ･プレゼンテーションを実施することで、実践的かつ能動的な教育を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 「目標に対する現状説明」の(1)，(2)への対応
	【課題】 (1)および(2) 今後のひき続き，教員と学生との十分なコミュニケーションに努める。その上で，必要に応じて(i) 教員が到達目標を分かりやすく説明する，(ii) 教員に対して気軽に質問・回答できる機会と雰囲気を作る，(iii) 学生に自信を付けさせるなど，個別かつ具体的な対応を行っていく。
根拠資料名	大学院生を対象としたアンケート結果

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

２．研究に関する総合的事項

	①
目　標	大学院生に対して，各種学会・ワークショップ等への参加を推奨する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年度）
実施 スケジュール	4 月から適宜，地域創成科学分野における各種学会・ワークショップ等の開催情報を修士課程の大学院生に提供・周知し，参加を促す。
目標達成を測定する指標	令和 4 年度中，「参加数／在籍院生数＝1」を目指す。
自己評価 （☑を記入）	□　達成した ☑　一部達成した □　達成できず要継続 □　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	在籍院生 14 名（M1：7 名，M2：7 名）に対し，各種学会や研究会への入会を促した。また学会大会、ワークショップ等の開催情報を得るための Web サイトやメールリングリストを紹介した。その結果， ・在籍院生 14 名中 12 名が関連する学会・研究会に入会した。 ・9 名が学会大会，各種ワークショップにおいて研究報告（口頭発表，ポスター発表）を行った。そのうちの 1 名が「学生優秀論文賞」を受賞した。 ・3 名，計 3 編の論文が審査付きの学術誌等に掲載された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	（調書） 院生各自の研究テーマに関連する学会や研究会への入会は，学術分野を巡る状況の理解，資料作成やプレゼンテーションテクニックの習得，コミュニケーションのあり方など研究者として多くのことを学べる機会になったものと考えている。
	【特色】 学会・研究会の紹介や情報を得るための手段の周知によって，入会の促進につながったと考えている。また関連学会の投稿論文や全国大会等の学術口頭発表会のスケジュールを示し，参加もしくは発表エントリーを促すことで学会誌投稿まで到達させることも可能であることが分かった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学会や研究会への入会はほぼ達成できたが，コロナ禍におけるオンライン開催など初学者にとって学術発表はハードルが高く，すべての院生で学会活動への積極的な参加は難しかった。
	【課題】 取り組んでいる修士論文テーマに関連するデータを速やかに取りまとめ，2023 年度中の口頭発表もしくはポスター発表へのエントリーを強く促したい。
根拠資料名	ヒアリング結果資料

2022（令和 4）年度　包括的な点検・評価報告書

様式２

３．その他に関する総合的事項

	①
目　標	専攻および各研究分野における学術交流，地域交流の活性化
実行サイクル	1 年サイクル（令和３年度）
実施 スケジュール	夏季休暇等，長期休暇期間を利用して，ワークショップやイベントの開催，研究交流を推進する。
目標達成を測定する指標	参加者を対象としたヒアリングやアンケート等
自己評価 （☑を記入）	☐　達成した ☑　一部達成した ☐　達成できず要継続 ☐　達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	長期休暇期間に，国際学会大会に１名，研究会に１名の計２名が研究交流にかかわるイベントに参加した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 地理空間情報技術分野として「G 空間 EXPO 2022（地理空間情報フォーラム）」，「GIS コミュニティフォーラム（ESRI ジャパン）」等外部のワークショップやイベントの周知及び参加促進を図った。自然公園関係については，財団法人日本交通公社主催の自然公園研究会の紹介と参加を促した。
	【特色】 学会や研究会が主催するイベントに加え，様々な業界，企業体が主催するイベントを横断的に紹介したが，これらイベントへの参加は将来の就職先の候補となりうる企業の情報提供にもつながった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 実際に学生自身が各イベントに参加したどうかリアルタイムでの把握ができていなかった。
	【課題】 教員，院生間でイベントに関する情報交換を積極的に行うこと，そして教員と学生との十分なコミュニケーションにより，参加したイベントについて定期的に報告してもらうようにしたい。
根拠資料名	ヒアリング結果資料